3　　鳴く鹿への哀れみ　　　　読解のつぼ①　語の省略・の・ば

今は昔、［　Ａ　］、にしてへりたる［　Ｂ　］に、「狩り［　Ｃ　］せむ」とて、者ども［　Ｄ　］ひたるさり、①のいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日死なむずれば、いたく鳴くにこそ」と（ⓐが）心がりければ、「②ささば、狩り［　Ｅ　］とどめむ。よからむ歌をみへ」と（ⓑがⓒに）言はれて、

ことわりや　いかでか鹿の［　Ｆ　］鳴かざらむ　③ばかりの命と思へば

さて、（ⓓは）④その日の狩りはとどめてけり。

語注

和泉式部＝平安時代の歌人。大江の娘。の娘・に仕えた。

保昌＝。和泉式部をともない、丹後国に国守として赴任した。

丹後＝丹後国。現在の京都府北部。

【原文】

今は昔、和泉式部、保昌に具して丹後へ下りたるに、「明日狩りせむ」とて、者ども集ひたる夜さり、鹿のいたく鳴きたれば、「いで、あはれや。明日死なむずれば、いたく鳴くにこそ」と心憂がりければ、「さ思さば、狩りとどめむ。よからむ歌を詠み給へ」と言はれて、

ことわりや　いかでか鹿の鳴かざらむ　今宵ばかりの命と思へば

さて、その日の狩りはとどめてけり。

問一　本文中の空欄ⓐ〜ⓓに、次の指示に従って「保昌」・「和泉式部」のいずれかを書き入れよ。〈2点×4〉

ⓐ　動作主となる人物　ⓑ　「言われた」人物

ⓒ　「言った」人物　　ⓓ　動作主となる人物

ⓐ〔　　　　　　　　　　〕　ⓑ〔　　　　　　　　　　〕

ⓒ〔　　　　　　　　　　〕　ⓓ〔　　　　　　　　　　〕

問二　本文中の空欄Ａ〜Ｆに、次の指示に従って適当な語句を書き入れよ。〈2点×6〉

Ａ　主格を示す助詞を補う　　Ｂ　文脈に合う体言を補う

Ｃ　目的格を示す助詞を補う　Ｄ　主格を示す助詞を補う

Ｅ　目的格を示す助詞を補う　Ｆ　助詞「の」を主格を示す助詞に改める

Ａ〔　　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　　〕　Ｃ〔　　　　　　〕

Ｄ〔　　　　　　〕　Ｅ〔　　　　　　〕　Ｆ〔　　　　　　〕

問三　傍線部①を、次の傍線部に特に注意して現代語訳せよ。〈6点〉

鹿のいたく鳴きたれば

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問四　傍線部②・③の解釈として最も適当なものを選べ。〈5点×2〉

②ア　そのように、あなた和泉式部がお思いになるのであれば、私保昌は狩りをやめよう。

　イ　そのように、あなた和泉式部がお思いになったので、私保昌は狩りをやめるつもりだ。

　ウ　そのように、あなた保昌がお思いになったとしても、私和泉式部は狩りをやめることができない。

　エ　そのように、あなた保昌がお思いになるのならば、あなたは狩りをやめてはどうだろうか。

〔　　　〕

③ア　私和泉式部が、鹿の命を今夜限りだと思うのならば。

　イ　私和泉式部が、鹿の命を今夜限りだと思ったとしても。

　ウ　鹿が、もし自分の命が今夜限りだと思えば。

　エ　鹿が、自分の命が今夜限りだと思うと。

〔　　　〕

問五　傍線部④とあるが、なぜ保昌は狩りをやめたのか。最も適当なものを選べ。〈6点〉

ア　和泉式部の考えにすべて納得できないものの、ことを荒立てたくないと思ったから。

イ　鹿に同情する和泉式部の気持ちを理解し、またその時の歌をすばらしく感じたから。

ウ　狩りをめようとする和泉式部の振る舞いや歌によって、反省の思いが生じたから。

エ　鳴き声に哀れさを感じていた時に和泉式部の歌を聞き、狩りをする気がせたから。

〔　　　〕

問六　本文に登場する和泉式部には、最初の夫との間に、歌人としても知られた娘・がいる。次の【文章】を読んで、後の問いに答えよ。

【文章】

　小式部内侍は重い病気になり、死の床にあった。そばで泣いている和泉式部の顔を見ながら息も絶え絶えに次の歌を詠んだ。

　　いかにせむいくべきかたもおもほえず親にさきだつ道を知らねば

と弱りはてたる声にて言ひければ、天井の上にあくびさしてやあらんとおぼゆる声にて、「あらあはれ」と言ひてけり。さて身のあたたかさもさめて、よろしくなりてけり。（『古今著聞集』）

⑴【文章】の内容と合致するものとして最も適当なものを選べ。〈4点〉

ア　小式部内侍が自分の身体を治すよう祈る歌を詠むと、その強い願いが天に通じてみるみる病気が治った。

イ　小式部内侍が死後に残る親を思いやる歌を詠むと、和泉式部は身体が熱くなるほど感激して思わず声を上げた。

ウ　小式部内侍が病に苦しむ親をいたわる歌を詠むと、同情した天の神が病を治すよう働きかけた。

エ　小式部内侍が親に先立つ不幸を嘆く歌を詠むと、天井から感心する声が聞こえた後に体調が回復した。

〔　　　〕

⑵本文と【文章】に共通していることの説明として最も適当なものを選べ。〈4点〉

ア　和歌の詠み交わしによって、詠み手の心がより通じ合うようになっている。

イ　和歌のやりとりを通して、超自然的な存在との意思疎通ができるようになっている。

ウ　優れた和歌を詠むことによって、人や鬼神の気持ちが動かされている。

エ　生きることへの願いを込めた歌によって、詠み手の命が救われている。

〔　　　〕

【解答】

問一　ⓐ＝和泉式部　ⓑ＝和泉式部　ⓒ＝保昌　ⓓ＝保昌〈2点×4〉

問二　Ａ＝が　Ｂ＝時　Ｃ＝を　Ｄ＝が　Ｅ＝を　Ｆ＝が〈2点×6〉

問三　鹿がひどく鳴いているので〈6点〉

問四　②＝ア　③＝エ〈5点×2〉

問五　イ〈6点〉

問六　⑴＝エ　⑵＝ウ〈4点×2〉

【現代語訳】

今となっては昔のことだが、和泉式部が、保昌に伴って丹後の国へ下った時に、「明日狩りをしよう」と言って、人々が集まった夜半、鹿がひどく鳴いているので、「なんと、かわいそうなことよ。明日死ぬだろう（という）ので、ひどく鳴くのだ（ろう）なあ」と（和泉式部が）嘆く様子をしたので、「（あなたが）そのようにお思いになるならば、（私は）狩りをやめよう。（代わりにあなたが）よい歌をお詠みなさい」と（和泉式部が保昌に）言われて、（詠んだ歌。）

もっともです。どうして鹿が鳴かないことがありましょうか（、いや鳴かずにはいられません）。（鹿は）今夜限りの命と思うと。

そうして、（保昌は）その日の狩りをやめてしまった。

【文章】現代語訳

　私は生きられそうになく、どうしたらよいか方法もわかりません。親に先立つ方法を知らないので。

と（小式部内侍は）弱りはてた声で歌を詠んだところ、天井の上からあくびをかみ殺したかのように思われる声で、（鬼神が）「なんとまあ」と言った。すると（小式部内侍は）身体の熱っぽさもなくなって、具合がよくなってしまった。

【補充問題】

問１　次の語の意味をそれぞれ答えよ（終止形でよい）。

①「具し」（１行目）

②「思さ」（３行目）

問２　「丹後」（１行目）とは、現在のどこか。その地域を含む都道府県名で答えよ。

問３　「狩りせむ」（１行目）を現代語訳せよ。

問４　「いたく鳴くにこそ」（３行目）における和泉式部の心情として最も適当なものを選べ。

ア　もうすぐ死んでしまうことに気付いた鹿に驚いている。

イ　仲間の死を嘆いて鳴き続ける鹿の思いに共感している。

ウ　次の日に死ぬことを悲しんでいる鹿に同情している。

エ　鹿がいつまでも鳴いていることを不思議に思っている。

【補充問題解答】

問１　①伴って　②お思いになる

問２　京都府

問３　狩りをしよう

問４　ウ